

朝鮮神話に見る女神の原像

北島, 由紀子

<https://doi.org/10.15017/1807134>

出版情報 : Kyushu University, 2016, 博士 (比較社会文化), 論文博士
バージョン :
権利関係 : Fulltext available.



氏 名 : 北島 由紀子

論 文 名 : 朝鮮神話にみる女神の原像

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は朝鮮半島の女神研究の基盤に立ち、包括的かつ多角的な視点から「女神」、「女神像」の本質を追及し、朝鮮半島には原初的な大地母神信仰があったのかという問題に迫るものである。朝鮮半島の原初的な女神信仰に迫ることができれば、新たな研究視点の導入により朝鮮神話研究の幅が広がり、従来とは異なった解釈が可能になる。

第1章では、従来の朝鮮神話の女神研究がもつ問題点、及び朝鮮神話の女神研究の意義について述べ、研究の目的について説明している。

第2章では、神話の女神を研究対象とするに際し、神話に対する先行研究、心理学、女性学などを含めた女神研究の概略を確認した。そのうえで朝鮮神話の女神に対する先行研究を整理している。

第3章では、文献の史料的特徴と編纂者の神話に対する考え方について考察した。代表的史料である『三国史記』の編纂者は支配階級にある儒学者であった。彼は『三国史記』の中で新羅神話を奇怪な話で信じられないと記した。一方もう一つの代表的史料である『三国遺事』の編纂者は、始祖が神異から出ても怪しむに足らないと記す。各文献における編纂者達の神話の捉え方と差異、女性観、さらに文献編纂時の社会的背景なども踏まえ考察を加えた。その結果、編纂者の神話に対する考えが所収の神話、さらに登場する女神の扱いにも影響を与えた可能性が高いことを示した。

第4章では、これまで男神のみが注目されてきた文献神話において、女神に徹底的に注目し、取り出すという作業を通して、女神の出自から行動までを整理、分類した。以前、朝鮮文献神話の女神を「三類型」に分類した論を発表したが（『朝鮮学報』二〇二輯 平成一九年）、さらに検討を加えて改めて分類しなおした。文献神話は「配偶型」と「母神型」という二類型のみに分類し、その中で文献神話の女神の特徴を細かく抽出した。婚姻の叙述をもつ女神（「配偶型」）と直接的な婚姻形態をもたない女神（「母子型」）にはその属性に差があることが確認できる。高句麗始祖母柳花は神話内容を精査した結果、唯一両方にまたがる特徴を持っていることが分かる。

第5章では、朝鮮半島の口伝神話の女神を分類し、文献神話との比較を試みた。口伝神話では文献神話には見られない生死を司る女神が存在し、構造的にも大きな差異がみられる。伝承媒体から生じる女神像の違いを改めて確認した。口伝神話では多様で豊富な女神が存在するため、二類型ではなく三類型で分類することが可能になる。

第6章では、文献神話の女神の類型化の結果、夫なく孕み始祖を産む「母神型」の女神には山神という属性があることに注目し、朝鮮の山女神について考察を進めた。特に山神との関わりが顕著な新羅における国家祭祀、中でも最も重要な大祀の対象である五岳三山について、その山神の性を検討した。その結果、従来言われてきたように山神の性が女神から男神に変容させられていく傾向があったとしても、新羅の山女神に対する崇拝は根強いものであったことを指摘した。

第7章では、神話から民間伝承まで様々な資料をもとに朝鮮の山神について検討した。朝鮮の山

神は「生」と「死」を司る。既に大地の一部でもある山神には“生み出す存在”でありながら“呑み込む存在”でもある大地母神の観念が続いていると指摘されている。大地母神の観念は人類初期の文化において普遍的とされるがそれは朝鮮半島の伝承からも見いだせるのかという疑問を呈した。

第8章では、朝鮮の山神の一形態と日本の山姥の中に共通点があることを示し、日本の山姥が既に大地母神であると指摘されている事実と、その根拠にもなっている「死体化生説話」、そして世界中で広く知られている作物起源説話である「ハイヌヴェレ型」が朝鮮の口伝神話である「門前本解」の伝承などにも存在することを確認した。民間伝承にまで幅を広げて検討を加え、朝鮮半島の伝承にみえる「ハイヌヴェレ型」の重要性について述べている。

さらに考古学的な観点からも検討を試みた。朝鮮半島では胸や乳房を強調するような土偶が発見されてはいるがその出土数は極めて少ない。しかし日本を含め周辺地域では考古学的な遺物と神話伝承の両研究から原初の女神信仰に言及する論が出されている。朝鮮半島には石器、土器、初期農耕など段階を経てさまざまな方面から文化の流入があった。旧・新石器時代の朝鮮半島と文化の伝播が指摘される地域においては既に女神信仰の痕跡が指摘されている。それらの文化の伝播の中に朝鮮半島が位置していることを鑑みれば朝鮮半島が東アジアにおける古層の女神信仰の唯一の空白部分とは到底考えられない。

第9章では、大地母神を指摘したのちに、改めて朝鮮文献神話の女神を検討し、従来の朝鮮文献神話の女神に対する見解とは異なった視点を入れている。それは従来、穀母神は地母神の意味をも持っておりそれは普遍的であるため高句麗神話の柳花もそうだと考えられる、というような見解ではなく、朝鮮半島の女神に徹底的に注目し、朝鮮神話伝承研究、さらに考古学的な検討を加えることで、改めて穀母神といわれた女神を大地母神まで遡れることを裏付けている。

第10章では、口伝神話と文献神話の関連性について女神研究の視点から言及した。“文献神話は口伝神話をもとに成立した”というのが従来の定説であるが、近年、それに反対する論も出されてきている。そもそも従来の定説の根拠の一つとして言及されてきたのが、天父地母原理と女神の苦難が両神話に共通して表れているという指摘であった。本稿では女神研究の立場からそれを再考察し、結果、両者には異質性が認められ、一概に文献神話が口伝神話をテキストとして成立しているとはいえないという結果にたどり着いた。

第11章では、分類で「配偶型」と「母神型」に唯一両方にまたがり、口伝神話的との影響関係をもつ高句麗神話の女神柳花について天父地母の観念を含めて再度検討した。この神話には男神の存在の希薄さや曖昧さが目立つのとは対照的に、崇拜対象となっていた女神自身のもつ大いなる神威性が見え隠れする。この女神の検討を通して、古層の女神信仰の上に女神の神威性をそぐように男神が付け足されていった経緯を述べた。

第12章では、総括として一連の考察を通じて朝鮮半島の原初的な女神の存在について言及した。各章で隙間を埋めるように論を積み重ね、各章において出した結論部分を総合的に鑑みると朝鮮半島に狩猟・採集時代にみられる大地母神信仰が存在した可能性が指摘できるのではないかという結論にたどり着いた。その上でならばこれまで検討されないままいわれてきた女巨人に大地母神の名残がある、であるとか穀母神とされていたものから大地母神の名残を見出すという裏付けができるのである。ギリシアの事例をもとに“朝鮮半島でも地母は穀母という意味をも併せもち、それは普遍的である”などという従来の見解ではなく、朝鮮半島の女神に徹底的に注目し、神話伝承研究に考古学的検討をも含め、朝鮮半島では穀母信仰以前の大地母神信仰が存在し、その後社会の変容とともに移行した状況があったこと、その移行とは大地母神から穀母神への変容だけでなく、女神自身が崇拜対象であったところに男神が夫として追加されていくという変容過程についても指摘した。